

平成22年度北九州市決算について

9月1日(木)から30日(金)にかけて行われました9月議会は、北橋市長就任第一期目4年間を総括する決算でもありました。4年間で800億円とした市長のマニフェストは実行不可能と言われていましたが、乳幼児医療費の入院自己負担助成の拡充や、中学校学校給食の全校実施、35人以下学級の実現、放課後児童クラブの全市的な施設及び体制整備による全児童化、高齢社会対策の推進、地元企業の受注拡大につながる「市民生活密着型公共事業」の重点化など着実に積み重ね、4年間で公約を上回る912億円の予算化を達成しました。またこの4年間は過去から引き継いだ多額の借金の返済がピークを迎える、一步間違えれば財政破たんの可能性も指摘される厳しい財政運営の中で、ついに平成22年度決算では財政調整用基金の取り崩しにたよらない、単年度収支の均衡を実現したことなどを評価、平成22年度決算は賛成多数で可決されました。

今議会では私は会派を代表し平成22年度決算の質疑(いつもの一般質問ではなく)に立たせていただき、以下のような項目内容で質問をしました。



三宅まゆみ
(ハートフル北九州)

1. 平成22年度の決算全般について

- 特色及びこの決算を踏まえた今後の財政運営についての見解と一期目の4年間を振り返って、マニフェスト事業の総括について。

2. 防災対策について

- 昨年度の防災教育に関する取り組みと更なる防災教育の取り組みについて
- 地域防災計画の見直しについて
- 学校の耐震化と学校施設全般のバリアフリー化について
- 本市のエネルギー政策について

3. まちなか居住対策について

- まちなかの空家対策や、コレクティブハウスの取り組み他今後のまちなかの住宅政策について

4. PCB適正処理について

- 昨年度の取り組み状況と多く残っている県外分の処理の促進について

5. 海外水ビジネスについて

- これまで受注したカンボジア以外の国も含め、昨年度の水ビジネスの取り組み状況と取り組む中の課題、また今後の方向性について。

6. 北九州スマートコミュニティ創造事業について

- 昨年度の取り組みと進捗状況、スマートメーターの普及について
- 市民へのわかりやすい広報について

7. 経済協力開発機構(OECD)グリーンシティプログラム推進事業について

- OECDのモデル都市に選定された意義と本市が選定された要因について
- モデル都市として、今後のプログラムの進め方と本市の対応について
- 市民へのPR、情報発信について
- 若松エコタウンのウエルカムゲートの設置(委員会で環境整備も要望)について

本市は、このたび、経済協力開発機構(OECD)の「グリーンシティプログラム」におけるモデル都市に、アジアで初めて選定されました。このプログラムは、OECDが、世界のグリーン成長を促進するため、都市の役割に着目して進めるもので、実際の都市における先進的な政策や取組を分析・評価し、世界各国・都市の政策に活かしていくものです。OECDは、様々な経済動向等の分析・予測を行い、各国に対する政策提言や多くの政策情報の世界への発信を行ってきており、国際社会において、権威ある機関であり、このようなOECDのモデル都市への選定は、これまでの本市の環境への取組が高く評価されたものであると考えられ、大変名誉なことです。特に今回モデル都市には、世界でパリ、シカゴ、ストックホルムと本市のわずか4都市のみが選定されており、本市として、そして市民としても、胸を張って誇れるものだと思います。本市は、今後世界のグリーン成長への貢献という重要な役割を担い、「世界の環境首都」を目指し、是非、大きな成果を上げるべく全力で取り組むべく私も環境建設委員長として頑張りたいと思います。



視察報告

10月4日～6日会派で震災被災地の宮城県釜石市と仙台市の隣名取市に伺って参りました。行きは仕事の都合で、先に出発した他の議員と合流するため、夜飛行機で東京に行き、夜行バスで花巻駅まで行き、そこから早朝JRに乗り換え更に2時間かけてというハードスケジュールで釜石市にたどり着きました。釜石市では「鉄のまち」のつなぎで復興支援で派遣されている北九州市の職員から話を伺い、私が9月議会の質疑で取り上げた「釜石の奇跡」として有名になった場所、事前の徹底的な防災教育により、生徒たちの意見で上へ上へと逃げ、最後尾は波に追いつかれながらも570名全員無事であった釜石東中学校、鵜住居(うのすまい)小学校の避難経路も辿りました。また名取市では北九州市に本拠地を置くNGO法人「ロシナンテス」の支援拠点に宿泊、夜遅くまで仮設住宅の集会所で被災者の方々とお話をさせていただく機会もいただきました。その中で、水たまりを見ただけでも泣

き出してしまうお子さんの話他、想像以上に子どもたちの心に影を落としていてメンタルケアの必要性を強く感じました。翌朝は6時起床で早朝に地区全体が流された閑上(ゆりあげ)地区を視察、どちらのまちも半年以上たった今も、がれきは集められて山積みされているものの、廃墟などはそのまま、被害の爪痕は今なお大きく残っており、その場ではただ立ちつくすばかりでした。ぜひこの視察を活かし、本市からできる限り復興の支援をして参りたいと思うと同時に本市の防災計画などにも活かして参りたいと思います。

